

芸術家としての批評家

——ペイターからワイルドへ

富士川義之

(東京大学助教授)

ウォルター・ペイターの『ルネサンス』に取められたモナ・リザをめぐる描写には、優美華麗なモザイクのように言葉を配置していくことを通じて人物画像を創造するという、印象を最も重要な基盤とするペイターの批評活動の際立って特徴的な様相が見られる。見られる対象がさまざまな複雑微妙な印象を生じさせ、その印象がペイターに内的ヴィジョンを誘発する。そういうヴィジョンの提示ということが、彼にとっては、いわゆる唯美的批評の中心をなすものであった。したがって彼の力点は、彼独自の鋭敏な感受性を通じてとらえた歴史や芸術についてのヴィジョンを提示する方向へと向かう。このモナ・リザ描写を典型例とするように、一種魔術的な効果をもつ、その独特の、まるで絵画やタペストリーの雰囲気にあこがれているような美文調の文体は、創作と批評の区分を曖昧模糊としたものとして一世を風靡したのであった。

ところでこのモナ・リザの散文は、いわゆる芸術としての批評の代表例と見てよいが、この芸術としての批評は、申すまでもなく、批評は一個の芸術作品として自立し得るのではないかという、きわめて唯美主義的な問いかけから生れたものである。そうした問いかけは、ペイターの場合、文学批評自体の存立の基幹に深くかかわる、文学と芸術上のすこぶる本質的な問題への執拗な意識化と反省を通じて獲得されたものにほかならない。と同時に、それはまた、社会のほとんど全領域にめざましい進出を見せるブルジョア階級による俗化の風潮に抗して、自己の世界をどう築き上げるかという、芸術家や文学者の側における切実な危機感を背景にして出てきた現象でもある。批評は一個の芸術作品として自立し得るかという、きわめて唯美主義的な問いが投げかけられるのは、こうした危機感を背景に、芸術創造における批評能力の重要性が明確に認識され、その能力の有無が作品のすこぶる重要な価値判断の基準とされるようになったときである。いったんそのことが認められた以上、その能力に至し権を与えようとする過激な主張が現われるのはもはや時間の問題と言ってよい。すなわち芸術としての批評の出現である。そしてワイルドの「芸術家としての批評家」がそうした批評の最先端にいた。

ワイルドは批評の自立ということを声高らかに述べたが、それは「印象」の形式化を窮極の基盤にして達成されると考えた。「最高の批評は個人的な印象の最も純粋な形式なのだから、それは創造よりも創造的なのだ」。「印象」という言葉は、たとえば現代におけ



る「不条理」とか「ナンセンス」といった言葉と同様に、新たな意味を付与されて世紀末に流行し、世紀末美学の特性を最も端的に、最も鮮かに指し示す標識の一つとなるのだが、ペイターを師と仰ぐワイルドは、この言葉を自在に操りながら、独特な誇張と逆説に華やかに彩られたきわめて挑発的な芸術論を展開していく。ワイルドはいう。「対象をあるがままではなく見ようとする」と。アーノルドの高名な「対象をそれ自体において、あるがままに見ること」を完全に逆転して見せたワイルドは、明らかに人の意表をつく逆説的なこの言葉を手がかりにしていれば至高の芸術形式と呼べる批評、すなわち創作よりも創造的で芸術的な批評を考察し、最高の批評とは、芸術作品を新たな創造を始めるための出発点と見ながら、批評家自身の「魂の記録」を記述したものにほかならないことを明らかにしていく。ここではもはや、ペイター風の「印象」さえも事実上ほとんど姿を消しているが、芸術からの芸術の創造ということに極度に執着するワイルドの姿勢は、必然的にはなほ自己陶酔的な、譬えて言うなら無に等しい空間のなかでの危険な浮遊状態を意味せずにはいない。「ルネサンス」から『意向集』、さらにはルカーチの『魂と形式』にいたる、「芸術としての批評」の作者たちが、多かれ少なかれ警戒していたのは、言うまでもなくこの危険性である。芸術に執するあまり、それを生み出した生の基盤とのかかわりを喪失することになるからだ。ワイルドの「芸術家としての批評家」第一部において、批評の創造性、芸術性もっぱら強調されているのに対して、それにつづけて第二部が置かれている主要な理由の一つはそこにあると言ってよい。この第二部ではすべてが「批評精神」によって支えられ、それを唯一の拠りどころにしなければならないことが説かれている。そしてこのような批評精神を世界中の人びとが自分のものとして身につけたなら、戦争も人種差別も悪もいっさいがこの世から追放されるだろうということが終結部で述べられる。芸術としての批評を熱烈に唱えた過激な唯美主義者が、トルストイ的な人道主義者、モラリストに見事に変貌してしまう。この矛盾はワイルドの精神的二重性の明白な表われと見ることもできようが、しかしそこには疑いもなく、芸術から生へ、すなわち芸術への偏愛を通じて、最終的にはそこから多くの養分を吸収している生そのものに結びついてこうとするワイルドのほとんど律義と呼んでもよい精神の運動の軌跡がくっきりと描かれていると思う。そしてその軌跡が、批評というきわめて意識的な行為の複雑さ、微妙さ、さらにはそのなほだしい不安定性を明らかにしていることもまた確かだと思われる。ワイルドの芸術論は、少なくともそのような証言としてほくには読めるのである。